



坂戸の自然、川と共に

—環境学館いずみ 自然観察会の成果—

坂戸市環境学館いずみ

坂戸の自然、川と共に

—環境学館いずみ 自然観察会の成果—

時を越えて高麗川と越辺川は
私たちのふるさとを潤してきました



ケロラ ケルルー 蛙の声が
いつしか夕暮れに
つつまれていきます





水と田んぼに 育まれてきた 生きものたち



上 カイツブリ 下 ヒヨドリ



今日も 元気いっぱいです



上 チョウゲンボウ 下 ギンヤンマ

写真提供 代 政雄



発刊によせて

坂戸市には県下有数の清流高麗川が流れ、城山・浅羽ビオトープなど豊かな自然が、その素晴らしさを身近に感じられる貴重な場所として今に残されています。

これらの自然環境を失うことなく後世に伝えることは私たちに課せられた使命であり、そのためには市民一人一人が身近な自然に関心を持ち、守るべき自然をどう保全していけばよいか、みんなで考えていかなければならないと思います。

さて、環境学館いずみでは、その趣旨に鑑み一般市民向けの自然観察会を10年以上にわたって実施しています。その成果を3年前に「坂戸の自然、川と共に」という冊子にまとめましたが、2019年の台風19号による浸水被害とその後の災害対策に伴う河川環境の変化など内容の見直しを行い、この度改訂することとなりました。

なお、初版では電子図書としてホームページに掲載しましたが、今回の改訂に伴い印刷物としても発刊する運びとなりました。これを機会に坂戸の自然を紹介するガイドブックとして、より多くの市民に利用していただければ幸いです。

2024年3月吉日
坂戸市長 石川 清

はじめに

本書は、坂戸市環境学館いずみで 2010 年から続けてきた自然観察会の講座内容をまとめたものです。初版は 2021 年 3 月 20 日に発行され、今回は改訂版として主に時点修正をおこないましたが、自然観察会を継続してきた 3 年の間でも自然を取り巻く環境が変わっているのを感じました。

講座を通して私たちが改めて気づかされたこと、身近な場所にもこんなに素晴らしい自然環境があるのだということをより多くの人に知ってもらいたい。そんな思いからこの本を作りました。この思いは今回の改訂でも変わりません。

内容は、読んだ方が自然観察会に参加してみたいと思うこと、また自然観察会のメンバーにとっては参考書として活用していただけるものを目指しました。

目次構成は、読者が利用し易い、読みたいと感じてもらえることを第一に考えて、旅行ガイド的に場所ごとにまとめました。写真を多く取り入れ、小学生から高校生、また自然観察に不慣れな方にも読んでいただけるようなわかりやすい内容としました。

自然環境には解明されていないことがたくさんあります。本書は自然観察会の講座で示されたことに準拠してまとめているので、種の同定の正確さや事象の評価について意見が分かれるところがあると思いますがご容赦ください。

本書が坂戸の自然を未来の子供たちに残す輪を広げる一助になることを祈念します。

2024年3月

環境学館いずみ 冊子づくり有志一同

表記の説明

① 絶滅危惧の記載方法

環境省が設定している全国カテゴリー区分（2020）の基準と埼玉県のカテゴリー区分（植物 2011、動物 2018）の両方を記載しました。記載は略号を用いています。

国：全国カテゴリー

県：埼玉県のカテゴリー（全県）

県の絶滅危惧のカテゴリーは、全県と地域別で評価されますが、坂戸市は低地と台地・丘陵地が分布しているので、見つけた場所でカテゴリーが変わります。このため、全県評価を採用しました。

カテゴリーの概要は以下のとおりです。

	全国カテゴリー区分 (環境省 2020)	埼玉県カテゴリー区分 (動物編 2018)
絶滅 (EX)	我が国では既に絶滅したと考えられる種。	埼玉県ではすでに絶滅したと考えられる種。
野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種。	埼玉県在来個体群で、飼育下でのみ存続している種。
絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種。	埼玉県において絶滅の危機に瀕している種。
絶滅危惧 I A 類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。
絶滅危惧 I B 類 (EN)	I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。	I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。
絶滅危惧 II 類 (VU)	絶滅の危険が増大している種。	埼玉県において絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられる種。
準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。	埼玉県において存続基盤が脆弱な種。現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有する種。
		準絶滅危惧 1 型 (NT1) 種本来の特性として脆弱な要素をもつ種。すなわち、生息地が局限されている、もしくは生活史の一部またはすべてにおいて特殊な環境条件を必要としている種。
		準絶滅危惧 2 型 (NT2) 生息状況の推移から判断して種の存続への圧迫が強まっていると判断される種。すなわち、生息地における個体密度の低下や生息地そのものの減少が顕著に認められる種や、過度の採集圧がかかっている、交雑可能な別種が侵入していることな

情報不足 (DD)	評価するだけの情報が不足している種。	埼玉県では評価に必要な情報が不足している種。環境条件の変化によっては、容易に「絶滅危惧」の категория (VU 以上) に移行する属性を有しているが、その categoria を判定するに足る情報が不足している種。
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。
地帯別危惧 (RT)	—	全県的には絶滅の危険性は低いものの、地帯区分 (注2) でみた場合にすでに絶滅した地帯がある、もしくは絶滅の恐れを危惧すべき地帯があると判断される種。

出典) 環境省 <https://www.env.go.jp/press/107905.html>

埼玉県 <https://www.pref.saitama.lg.jp/a0508/red/reddatebook2018.html>

以上に基づき、記載の事例は以下のとおりです。

記載例) 国 E N、県 C R

全国では絶滅危惧 I B 類ですが、埼玉では絶滅危惧 I A 類に区分されていることを示します。

記載場所は、基本的には種の名称の右側としました。

② 鳥と魚などのサイズの記載方法

全長もしくは丈は L、幅は W の略字で記載しています。

各種ごとの L の意味は以下のとおりです。

種類	L : 全長 (cm)	W : 幅 (cm)
小動物	カエルは、口の先から尻までの長さ カメは甲羅の長い方の長さ	—
鳥	嘴の先から尾羽の先までの長さ	翼開長、羽を広げた時の両側の翼の先の間長さ
魚	口の先から尾ひれの先までの長さ	—
虫	一般には頭の前からお腹の先までの長さ 蝶の場合には、羽を広げた時の羽の両端の直接距離	—
植物	地面からの高さとして「高さ」で表示	

記載場所は、原則として、種名の右側としました。絶滅危惧との併記では、絶滅危惧の分類の後に記載しました。

③ 写真の撮影年月日

特に撮影年の記載がない写真は、すべて 2021 年以前の撮影です。

目次

写真	6. 越辺川水系小沼 86
発刊によせて	6.1 植物 87
はじめに	6.2 鳥たち 91
用語の説明	6.3 水田地帯 98
1. 一昔前の坂戸の自然 1	7. 城山 102
1.1 市長の子供のころ 1	7.1 地層と湧水 105
1.2 坂戸の自然と共に育って 3	7.2 植物 114
 	7.3 鳥たち 123
2. 私たちが考える坂戸に残したい自然 4	7.4 虫たち 128
3. 自然観察スポット 9	8. 坂戸台地の地質と地下水の流れ 135
4. 坂戸台地 11	9. 観察のコツ 139
4.1 湧水、ため池、調整池 12	9.1 鳥たち 139
4.2 多和目周辺の清流 18	9.2 植物 141
 	9.3 魚たち 142
5. 高麗川水系 22	10. 観察の記録 144
5.1 滝不動湧水群 23	10.1 野鳥観察会の記録 144
5.1.1 湧水 25	10.2 魚観察会の記録 148
5.1.2 植物 32	10.3 虫たちの記録 149
5.1.3 鳥たち 42	
5.1.4 水の中の生きもの 45	11. 講師紹介 152
5.1.5 虫たち 50	索引 153
 	編集員一覧 157
5.2 浅羽ビオトープ 54	
5.2.1 植物 56	
5.2.2 鳥たち 63	
5.2.3 虫たち 70	
5.3 泉町桜堤公園付近 74	
5.3.1 水の中の生きもの 75	
5.3.2 虫たち 82	

コラム

4. 坂戸台地

逆木の池 15

水の恵みマップ 17

多和目湧水水路の保全と水路管理 21

5. 高麗川水系

お不動さん 24

滝不動の謂れ 28

湧水が湧き出るしくみ、湧水の季節変動 30

多和目のヒガンバナ、ヤナギの話 41

四日市場カワニナ愛好会 47

メダカの学校 49

外来種の話、分布を拡大しているチョウ 53

浅羽ビオトープとは 55

残念な景観 58

残念な景観の残念な植物 61

自然観察会参加者の声 62

市の鳥について 65

野鳥観察のマナー 66

鳥から知る環境のものさし 67

森の妖精ゼフィルス、南からの使者あらわる 73

魚の目から見た高麗川 77

川魚の生い立ちと高麗川に住んでいる魚 79

鳥の羽ばたき 81

虫たちの冬越し 85

6. 越辺川水系小沼

小沼のサシバ 95

飯盛川河口付近の河畔林の移り変わり 96

2019年台風19号(2019年10月12日) 97

水田のしくみ 101

7. 城山

多和目城跡、午の沢の「道しるべ」 103

古代交通と流通 104

炭化木 112

高麗川沿いの城山の崖の崩壊 113

クワガタムシの大あご 132

9. 観察のコツ

野鳥が好きな木の実 140

生き残ったホトケドジョウを守る方法 143

観察の一コマ

5. 高麗川水系

色違い 69

哺乳類 80

7. 城山

鳥のへんな恰好 127

カエル 134

10. 観察の記録

大人になる 147

1. 一昔前の坂戸の自然

1.1 市長の子供のころ

1.1.1 高麗川で泳ぎ、魚とりをする

子供の頃は、高麗川の中里から戸口あたりで魚を捕ったり、泳いだりした。小学生から中学生の頃（昭和30年始めから40年前半）は学校が終わったら一日中、川にいた。

環境学館いずみの前あたりが、6本杭、5本杭とあって、飛びこみができるほど深いところもあった。今は流れが変わってしまっている。

また、当時は建設ラッシュで、高麗川でも砂利を取っていた。このため、深いところがあり、砂利穴を知らない遠くから来た人は、亡くなったりした。砂利取り業者はいくつもあり、線路があつてトロッコを走らせていた。

高麗川には魚が沢山いた。「たたき」や「せぼし」という方法で捕った。

「本流し」もやった。木とか孟宗竹を逆さにして水を流す魚とりの方法だ。

ホトケドジョウ、スナメドジョウ（シマドジョウ）、ウナギ、ソウゲンボウ（カマツカ）、ソソ（クチボソ）、クキ（ウグイ）、ハヤ（コイ科のヌマムツ、カワムツなどの総称）、カジカ、マルタ（マルタウグイ）、ヤマベ（オイカワ）がいた。

カジカは何種類かいて、卵をとって食べた。

マッカチン（アメリカザリガニ）もいて、海のエビと同じように美味しかった。

アユは、川虫を捕って餌にして釣った。5月頃から釣れた。堤防沿いには中川という水路があった。土手の上から鯉が釣れた。くるま堀の水路には樋管（ひかん）があつて、アユが手づかみで捕れた。

「おきばり」と言つて石を置いて糸を川の横断方向に張つて、いくつも針を付けて取る方法もやった。ナマズ、ウナギが捕れた。

「せぼし」は夜仕掛けた。

昔は黄色いシジミがいた。今は黒いシジミしかいない。

シマドジョウは卵を持った時がうまかつた。

高麗川にもサワガニがいた。5本杭、6本杭の湧水があつたところにいた。

越辺川は台風の後、水が引くと色々な魚がとれた。ただ、越辺川は高麗川に比べて汚く魚の味が良くない。今は高麗川も同じで、最上流部にいかないと昔の味の魚がいない。

島田の人が、サンロードにあつた料亭大島屋に魚を捕つて持っていき買ってもらつていた。

アカマムシを捕つて売っている人もいた。

ホタル狩りに行つて、水に落ちたこともある。ホタルを捕る時には、「地面に二つ光ると気をつけろ、へびがいる」と言われた。マムシは、粟生田あたりでは見たことはなく、中学1年の時に一度だけ栗の木に絡まっているのを見た。

泉町の水路があつたところでは、夜帰る時にタヌキに化かされると言われていた。タヌキのでるような場所だったが、酔っぱらいの言い訳だろう。

水が豊富だったから「泉町」という名前が付いた、漁業も盛んだった。

ヒバリやツバメ、モズが減っている。昔はいなかった見かけない鳥がいる。

高麗川の水が少なくなっている。

河川改修したので、昔のような深場がない。川が直線になったので、魚が卵を産めない。ヤマベ（オイカワ）はいるが、クキ（ウグイ）はいない。カワムツが増えた。ブラックバスは誰かが放したからいる。

今は、川のことを分かっていない人が増えた。川を水路にしている。昔の川ではない。自然をいじると直すのが大変だ。それで改修をやり直しているところもでてくる。

高麗川は水量が多ければ水はきれいだった。

砂利の川だったが、今は草がたくさん生えている。植物も変わった。アレチウリなどが増えた。

昔のように、子供が泳げる高麗川にしたい。

1.1.2 井戸の話

粟生田には池がたくさんあった。水がいたるところで湧いていた。

家（泉町）にも丸い井戸があって、夏はスイカを冷やした。家の裏には池があった。近所にも凄い池があった。

今は、井戸も水位が低くなって掘っても水が出なくなった。

■ 参 考

この記事は、これまでの観察会の開会式や閉会式の挨拶で石川市長がいつも話されている子供のころの坂戸の自然について、2019年11月14日に再度市長に取材をして作成したものです。

言葉の説明

せぼし：浅い瀬の上流と下流をせき止め、水を抜き、魚をうけに集めて捕る漁法。

たたき：浮きと重りが無い釣りの仕掛けで、釣り針にトリモチ又はビーズをつけた道具を使い、撒き餌をしたところに、手首を上下させて釣る方法。魚が餌（虫など）と勘違いして針に食いつく。撒き餌はさなぎ粉、繭を取った中身を乾燥、粉にしたもの。

時代背景

1959年（昭和34年）伊勢湾台風上陸

1960年（昭和35年）カラーテレビの本放送開始

1964年（昭和39年）東京オリンピック開催

1.2 坂戸の自然と共に育つて（一市民の回想）

私の実家は田んぼのすぐ脇なので、毎年田んぼに水が入ると毎晩カエルの大合唱がきこえてきて、夏の夜はクーラーもなく網戸にしてカエルの歌声を子守唄のように聴いて眠りました。庭木にはよくカエルやバッタが突き刺さっていてモズは怖いなと思いました。田んぼにレンゲが咲くころにはネックレスやブレスレットをつくって遊びました。

飯盛川は護岸工事をする前、子供がジャブジャブ素足で入れるぐらいの小川で、ドジョウがニョロニョロ泳いでいました。

田んぼには大小の白サギが飛んできましたが、私はその頃親子だと思っていて、大人になってからダイサギ、チュウサギ、コサギと別々の種類のサギなのだとなりました。

さらに少し詳しい知識を得ようと子育てが一段落したころに埼玉県内の他市の自然観察会などに参加してみて、緑地保全地区でも意外に虫や鳥が少ないことを知りました。坂戸は都心からそれほど離れていないのに生きものの種類が多いところなんだと再確認しました。市外の様子を知ることで、あらためて坂戸の自然の豊かさに気づくことができましたのです。「青い鳥」は身近にいるとはまさに本当のお話でした。

それでも私が小学生だった昭和40年代ごろと今ではかなり風景が変わりました。

駅名が「坂戸町駅」から「坂戸駅」に改称されたのは1976年（昭和51年）ですが、そのあたりからどんどん都市化が進み「北坂戸駅」が増設され、国道407号線や高速道路のインターチェンジや「若葉駅」もできて、人口も増えていきました。

いつのまにか桑畑や茶畑が道路や住宅地になり、田んぼも畑も減りましたが、ちょっと気をつけて自然の中に目を向けると、今でも坂戸にはタヌキやイタチ、野ウサギ、野ネズミそれを狙う猛禽類などたくさんの生きものが潜んで暮らしています。高麗川や越辺川の河畔や城山の森などウグイスやキジの声を聴きながら生きものを間近で見ることができる場所がまだまだあります。

埼玉県レッドデータブックに載っている生きものもいます。

市内の移動は車か自転車と決めている方が多いことと思いますが、たまには是非とも徒歩でぶらりと市内を散策してみることをお勧めします。

私たちと共に坂戸で暮らしている元気な仲間たちにきっと会えることと思います。多くの生きものたちとの楽しい出会いがこの坂戸でこの先いつまでもずっと未来まで続きますように。



コサギ

(松田)

2. 私たちが考える坂戸に残したい自然

2.1 趣旨

坂戸市にはまだ貴重な自然が残されています。散策するとホッとする場所が身近にあり、そこで思わぬ生きものに出会うことがあります。私たちも10年間の自然観察会の中でいろいろな生きものに出会い、今まで気づかなかった身近な場所にこんなに素晴らしい自然があることをあらためて知ることができました。

例えばどこにでもいると思っていたものが実は今や細々と命を繋いでいる貴重な生きものだったり、坂戸ならではの環境にいる希少な生きものが見つかったりして、驚いたこともたびたびありました。また、知る人ぞ知る貴重な景観や珍しい地形・地質があることも知りました。坂戸市は1970年代以降の急激な人口増でそれまでの里山景観が一変しましたが、すべてが失われたわけではなく、まだまだ貴重な自然が残されているのです。ただ、これからは少子高齢化の中で耕作放棄地の増加など新たな環境変化も考えられ、残された自然環境の保全は決して簡単ではありません。

そこで、「私たちが考える坂戸に残したい自然」と題して坂戸に残る貴重な自然を表にまとめてみました。残したい自然の選定理由と生存に対して私たちが何を心配しているのかをご覧ください、みなさんにもぜひ実際に現地に行って観察することをお勧めします。そこで残すべき自然かどうか確認していただいてその価値を共有することが、今後の保全に繋がるきっかけになるのではないかと期待しています。

そして、この本で紹介する自然を100年後の子どもたちに残せることを願っています。

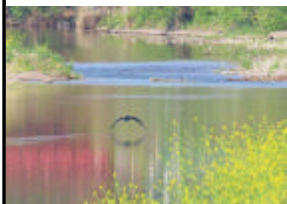
2.2 選定方法と記載事項

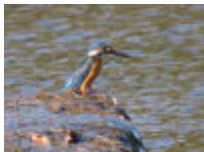

選定は、講座で講師の方々から教えていただいた種や場所から、冊子作りのメンバーの推薦で決めました。この本で紹介した自然を対象に特に残したい、またこれが残されていけば環境が保たれると考えられる場所や動植物です。

講座で観察していない市の天然記念物などもありますが、既に保全されているので除きました。県のレッドデータブックに記載されているか否かより、坂戸市ではほとんど見かけず希少なものを、市民に親しまれているものを掲載しました。以上の内容なので、学術的な評価はおこなっていません。



2.3 川

(1) 川の流れ（高麗川、葛川など）



自然	選定理由	私たちの心配
豊富な水量の清流 	・1970年以前の坂戸の子供たちは高麗川で泳ぐのが当たり前で飛び込むこともできたそうです。今でも湧水のお陰で埼玉県でも有数の清流です。	・昔を知る人は水量が大幅に減少していると指摘します。高麗川の水や伏流水の利用規制や湧水の増加対策が必要です。




<p>・カワセミ</p>  <p>・ジュズカケハゼ</p> 	<p>・カワセミは高麗川を代表する鳥で、川面を飛ぶ姿はみんなに愛されています。1970年代公害で汚れてしまった川が魚や鳥が棲める川へと復活したシンボルでもあります。</p> <p>・ジュズカケハゼは湧水の川だからこそ見られる魚の代表です。子供達にも簡単に捕まえられる、自然とふれあえます。</p>	<p>・護岸整備が進み、コンクリート護岸となると、カワセミが魚を狙う小枝や営巣場所もなくなります。砂地の湧水口がなくなってしまうとジュズカケハゼは子育てができません。</p> <p>・近年、コクチバスが増え、在来の魚を捕食するのも心配です。</p>
--	--	--

(2) 河原




自然	選定理由	私たちの心配
<p>石ひろいができる河原</p>   <p>・イカルチドリ</p>	<p>・小石のある河原は浅瀬で直接水に触れられる場所です。親子あるいは子供同士で、きれいな石や変わった形の石を探し、「水切り」をして遊んだ河原。思い出をつくり、心を育む場所です。</p> <p>・イカルチドリは石の間に卵を産む高麗川の鳥として馴染み深いです。以前から鳥を見てこられた方から「市の鳥」にしてはとの意見もでていました。</p>	<p>・都市化の進む町、護岸工事の必要な中でも、自然な形で河原が残ってほしい。それを大切にする社会であってほしいです。</p> <p>・水量を確保し、適度に増水し、泥が流される高麗川の姿を残し、草地化されない工夫が必要です。</p>

(3) 河畔林

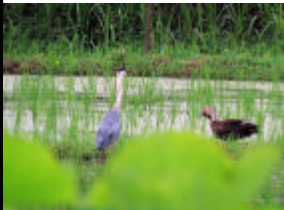


自然	選定理由	私たちの心配
<p>小沼などのまとまった河畔林</p>  <p>・オオタカ</p> 	<p>・コナラなどが大きくなりすぎ若返りが必要ですが、植生が豊かで色々な樹木や草花を見ることができます。コハクチョウ、猛禽などの野鳥も豊富です。</p> <p>・オオタカが舞う雄姿が坂戸の景色です。また、坂戸の生態系の頂点として欠かすことができない種です。</p>	<p>・2019年の台風19号で河川の改修を求められており、小沼は現計画では守られていますが、その他は河床掘削や伐採の可能性があります。</p> <p>・1990年代以降で、6種の野鳥が坂戸から姿を消しました。坂戸の環境の変化が鳥たちに影響しています。</p>

<p>・コムラサキ</p> 	<p>・コムラサキは、食草（食樹）がヤナギ類のため、市内では高麗川、越辺川流域に広範囲に生息していますが、個体数は意外に少ないです。</p>	<p>・残っている緑も太陽光発電設置の脅威、林の老齢化の問題を抱えています。営巣時の写真撮影などの人の脅威による野鳥の営巣放棄も心配されます。</p>
<p>浅羽ビオトープ</p>   <p>・トラフシジミ</p>	<p>・気軽に自然に触れることができ、しかも鳥たちの種類も多い場所になりました。 高麗川ふるさとの会による管理が実を結んでいます。 ・トラフシジミは市内では浅羽ビオトープと城山で確認されているだけで、しかも年間の確認数もたいへん少ないです。</p>	<p>・高齢化などにより管理の継続の心配、写真撮影のための伐採や餌付けも問題です。 ・トラフシジミは食草が広範囲にわたっているため、食草の消滅または減少による生存の脅威は少ないと考えられますが、生息環境全体の保全は必要と思われれます。</p>

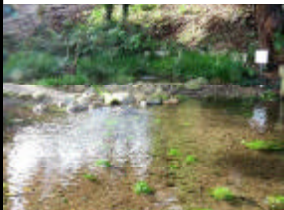
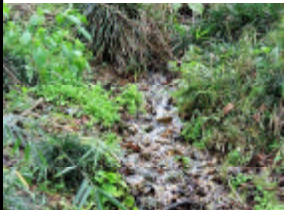
2.4 土水路



自然	選定理由	私たちの心配
<p>多和目、滝不動などの湧水水路、城山周辺、森戸などの田んぼの土水路</p>  <p>・ホタル</p>  <p>・ホトケドジョウ</p> 	<p>・土水路は高麗川と田んぼや丘陵地の清流を結ぶ生きものの大事な移動の場所です。また、土水路の水域と土の斜面は昆虫たちが生育するために不可欠で、生態系を育む場所です。 ・坂戸には何箇所かで野生のホタルを見ることができます。ホタルを見て自然が残っていると感ずることができます。 ・ホトケドジョウは水がきれいで、流れが穏やか、周辺に草が生えている環境を好みます。昔は沢山いたようですが、今では激減しています。</p>	<p>・水路のコンクリート化や耕作放棄により通水されなくなり、土水路が消え続けています。 ・ゲンジホタルにはカワニナと土水路が欠かせません。 ・ホトケドジョウは県内でも急激に減っている種で、高麗川本流、おかねが井戸周辺、一本松の鉄砲道にも昔はいましたが今は絶滅しています。これからは土水路の3面張り水路への改変、湧水湿地や河川のワンドなどの埋立が脅威です。</p>

2.5 田んぼ




自然	選定理由	私たちの心配
<p>新しき村の水田等</p>  <p>・メダカ</p> 	<p>昔ながらの谷津田でガマの穂やオモダカ、タコノアシなど田んぼに関わる植物が繁茂し、この結果、動物たちの生物多様性も保たれています。</p> <p>・メダカは、ほ場整備を免れた限られた環境にしか生息しません。坂戸では数箇所で見ることができます。</p>	<p>高齢化などで休耕田が増えています。</p> <p>・メダカは田んぼの耕作放棄の増加、川と田んぼを行き来できる環境の喪失、また飼育が盛んな外来種を放流するための交雑で在来のDNAが守れない状況が全国で広がっています。</p>
<p>多和目字下渡戸のヒガンバナの景色</p> 	<p>・近年各地に見られる観光を目的とした管理の下ではなく、昔からの日本の風情を感じさせる場所です。</p>	<p>・周辺の耕作されなくなった田畑が今はまだ草地ですが、風情を損なう駐車場や運動場などになってしまう可能性があります。</p>

2.6 崖（段丘崖など）

自然	選定理由	私たちの心配
<p>清水ノ上親水公園及び周辺の湧水</p> 	<p>・坂戸台地の段丘崖の湧水で湧水口は小さいですが、いたるところから湧いていて滝不動と並び坂戸台地の代表的な湧水です。夏冷たく、冬暖かい湧水に簡単に触れることができます。</p>	<p>・周辺開発による埋立や汚水の流入が危惧されます。金魚や国内外来種を放されることによる生態系の改変が心配されます。</p>
<p>滝不動湧水群</p>  <p>・滝不動の湧水斜面の山地性植物群落</p>	<p>・砂利の斜面を覆うように流れる湧水は、全国的にも珍しいです。坂戸台地の代表的な湧水です。</p> <p>・豊富な湧水群が冷涼な環境をつくり、本来山地に生える植物が標高の低い台地に群落として生えています。</p>	<p>・民家が近接する崖で斜面安定と環境保全を両立させる必要があります。</p> <p>・浅い地下水が湧いているので、不法投棄や農薬により汚染されやすいです。</p> <p>・ノイバラなどの蔓延により植生が脅かされています。</p>

<p>滝不動の里山風景</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・四日市場の馬頭観音（諏訪神社と桜並木の間）から滝不動と高麗川上流を望む景色は、坂戸台地と台地を作った秩父の山、高麗川とその恵みを受ける人の暮らし（里山）が見られます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・農家が高齢化や後継ぎがないなどの理由で水田の耕作放棄となり、水路の通水がなくなると乾燥化して荒地になってしまいます。
<p>城山の崖</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・高麗川の1号堰上流の左岸には、城山の崖が連続します。護岸がなく、飯能層の堆積ドラマが見られる大露頭です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最近、大規模な崩壊があり、斜面の補強工事が行われると見ることができなくなります。

2.7 丘陵

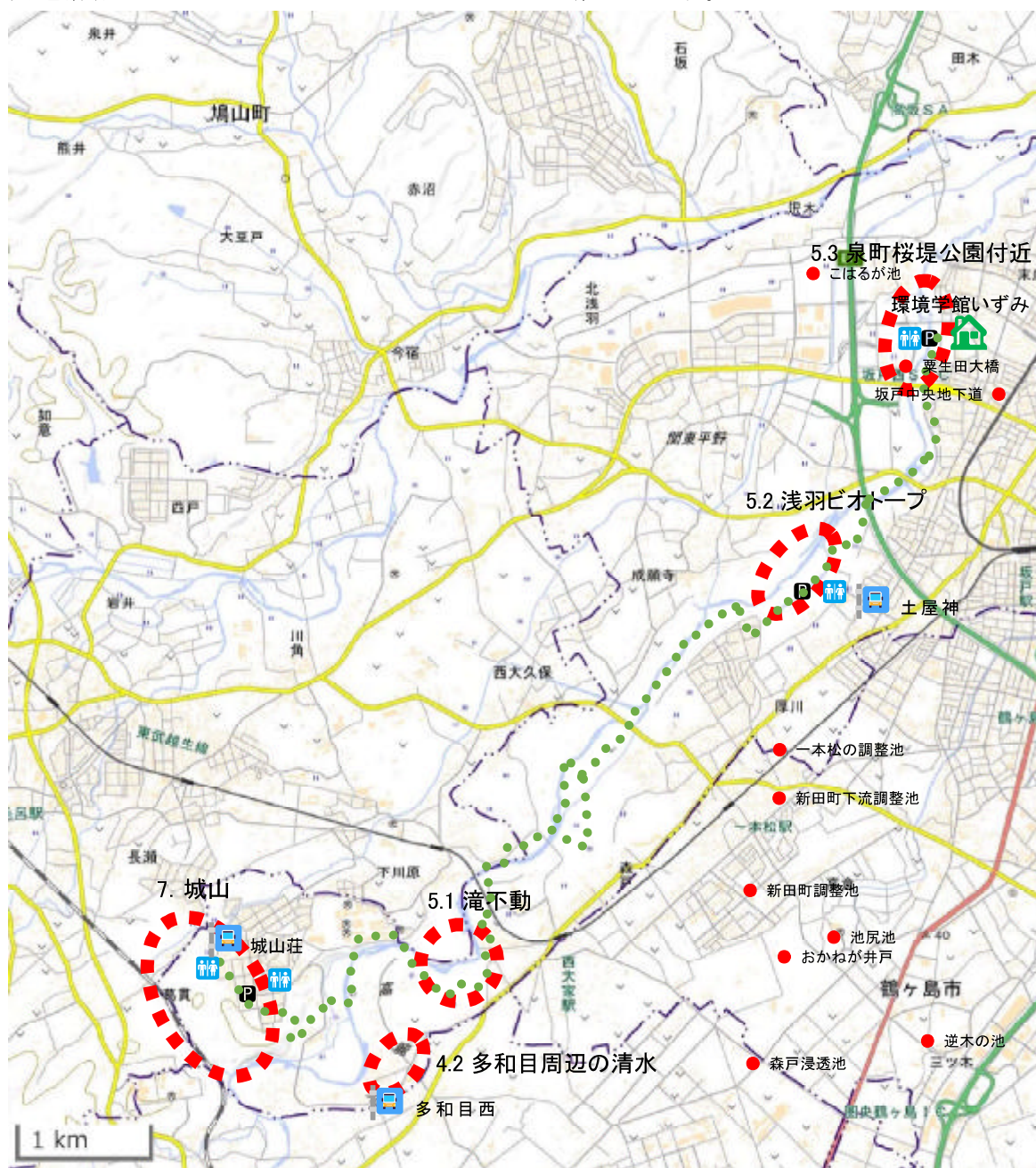
自然	選定理由	私たちの心配
<p>城山の森</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・ニホンアカガエル ・ミルンヤンマ  	<p>湧水の山で84種の希少種の生息が確認されている坂戸市の唯一の山で、子育てをする鳥たちをはじめ生態系が豊かです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニホンアカガエルは森と水田を行き来できる今や貴重な環境が必要な種です。 ・ミルンヤンマは市内では城山で確認されているだけで、年間の確認数も大変少ないです。生育場所が河川上流部に限られているため、環境の指標にもなります。 	<p>市街地に隣接し、開発されやすく、また多くの人を訪れます。自然観察や散策だけでなく、ランニング、サイクリングなど利用の多様化が進んでいるため利用方法のルール化が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニホンアカガエルは田んぼの耕作放棄の増加、アライグマによる捕食が危惧されます。 ・ミルンヤンマは開発などにより、城山の環境が破壊されると、市内での生存は皆無となってしまふ恐れがあります。

3. 自然観察スポット


本書で紹介している自然観察お勧めスポットは、下図に示した泉町桜堤公園付近、浅羽ビオトープ、滝不動、多和目の清流、城山、小沼です。


また、坂戸台地の湧水や池もそれぞれの地点として示しています。


その他の関連施設として、環境学館いずみを入れました。まずはいずみに立ち寄り、関連情報やパンフレットを入手されることをお勧めします。




凡例


 : 環境学館いずみ


 : バス停

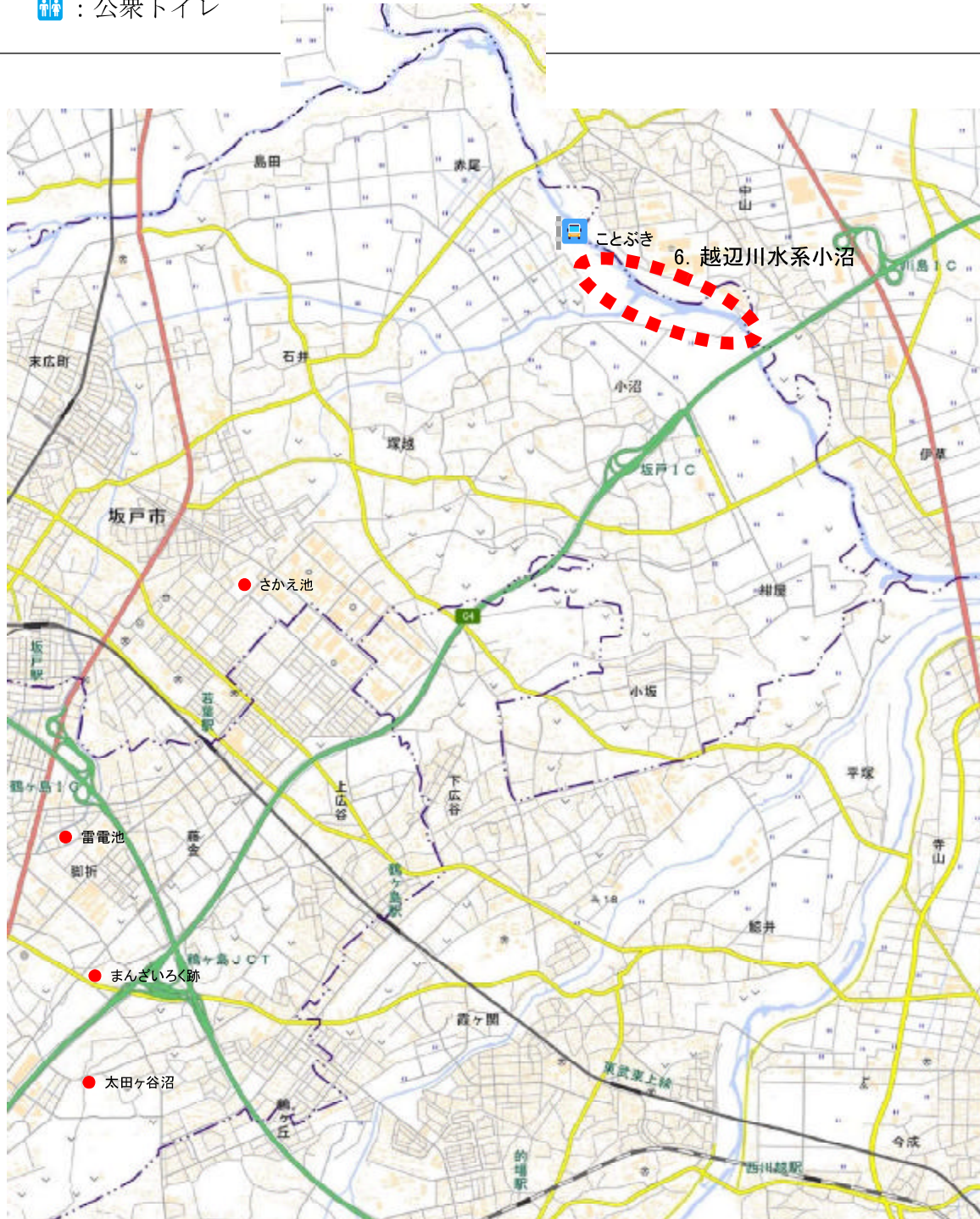
 : 駐車場

 : 公衆トイレ

 : 高麗川ふるさと遊歩道

 : 主な観察スポット (番号は目次と合わせています)

 : その他の観察スポット



4. 坂戸台地

坂戸台地は、扇状を示す台地で、日高市の巾着田を要に、北東に拡がり、約 58 km² の面積を持っています。北西側は高麗川、南東側は小畔川に挟まれ、日高市、鶴ヶ島市、坂戸市に拡がり、扇の扇端部は越辺川の右岸に拡がる赤尾、小沼、横沼などの水田地帯に接します。

高麗川と、旧入間川によって作られた台地で、秩父から運ばれた砂礫（されき）などこれを覆う火山灰からできています。このため、地下に水を貯えることができ、水の恵みを悠久のむかしから私たちに与えてくれた大地です。私たちの自然はこの坂戸台地が織りなす水循環のドラマによって支えられています。

長い間、雑木林と農地が広がり地下水を涵養（かんよう）しやすい環境にありましたが、1970年代の人口増と宅地開発で大きく様変わりしました。それでも滝不動などの湧水、また雷電池など湧水跡が公園になり面影を残しています。また、湧水を起源とした小川も、今は雨水排水路となっていますが、下水道の完備により、きれいなせせらぎとして復活しています。

湧水、せせらぎと井戸は人々の生活と密接に関係しています。湧水やせせらぎを眺めながら、歴史を散策するのもお勧めです。また、井戸も意外と身近なところにあります。そして、何より、高麗川がきれいで水量を保っているのは坂戸台地からの湧水のおかげです。高麗川の土手を歩いて、高麗川の流れを見ながら坂戸台地の鼓動を感じてはいかがでしょうか。 (稲垣)



小沼から坂戸台地、高麗川源流の関東山地を望む

4.1 湧水、ため池、調整池

■ 行き方

所在地：坂戸市と鶴ヶ島市

電車：東武越生線「若葉駅」、「一本松駅」

若葉駅の東口にはレンタルサイクル（1日500円、2023年現在）あり。

車：駐車場は池尻池、太田ヶ谷沼に完備。

公衆トイレ：池尻池と太田ヶ谷沼に完備。

■ 魅力

水辺は水循環の仕組みを垣間見せます。坂戸の環境は水と深い関係にあります。都市化のために見えなくなってしまった湧水や水場を探して、貴重な水資源と私たちの繋がりを感じると共に、水の流れに癒やされましょう。

坂戸市の環境学館いずみにおいて開催された「平成27年度高麗川の未来を考える」で、環境マップ（水の恵みマップ）を作成しました。Googleマップのマイマップですので、スマホで見ることができます。スマホをもって、自転車にのって、水辺を巡る旅はいかがでしょうか。お弁当を持って回る1日のコースになります。

周辺には高麗川ふるさと遊歩道や、歴史を感じる寺院もあるので、何日かに分けて、ハイキングを楽しむのもいいかもしれません。



案内図

① 雷電池



② まんざいろく跡



③ 太田ヶ谷沼



④ 逆木の池



⑤ 森戸浸透池



⑥ おかねが井戸



⑦ 池尻池



⑧ 新町調整池



① 雷電池（かんだちがいけ）

鶴ヶ島市民ならだれでもが知っている憩いの場所です。竜神様のお祭りは必見です。涸れてしまった坂戸台地の代表的な湧水、水の守り神が帰ってくるのを待っています。今はポンプアップした水を流しています。南側の台地との段差が湧水地の面影を残しています。かつては、この水で水田を潤していました。遺構の説明看板があります。

② まんざいろく跡

ここもかつては雷電池と同じ豊富な湧水があったところですが、残念ながら盛土され畑になっています。鶴ヶ島市史「ふるさと鶴ヶ島」によると「大字藤金字泉橋の水田1haは地下水が地表に湧き出るところとして、遠い昔からまんざいろくと呼ばれてきた。田んぼの中で足を抜くと水が出るほど湧水がでた。水の中にたんぼが浮いた状態であった。昭和18年の干ばつでもここだけは湧出したと言われる」と記載されています。

③ 太田ヶ谷沼

この沼は鶴ヶ島運動公園内にあり、魚の釣り場として人気があります。また、桜の名所として親しまれているほか、親水デッキ、水上デッキが設置されています。台地の谷奥からの流れが地下水として谷頭に湧き出し、この湧水を灌漑用水に利用するため造ったのがこの沼です。周辺には縄文時代の土器が発見されており、古代人もこの湧水を利用して生活を営んでいたことが推測できます。

④ 逆木（さかさぎ）の池

武蔵野国郡村誌に、153m×23mの規模で水田の用水に使われていたと記載されているそうです。名前の由来は、説明板があります。逆さ木の池は西方の日高市高萩の森林に水源をもち、地下水は台地の下を通り抜け、この池に流れ込んでいたそうです。

⑤ 森戸浸透池

まっ平らな大地にぽっかりと空いた大きな窪地です。大雨の時に、雨水を排水・浸透させるための池のようです。通常は水はありません。

⑥ おかねが井戸

高倉市民の森の中にあります。坂戸台地の忍野八海？、砂を巻き上げる湧き口を見ることができます。飯盛川の源流の一つ、地形変化点の湧水です。名称の由来については瞽女（ごぜ）の「おかね」が入水したことからと言われてはいますが、詳細は不明です。水が豊富だったことからこの周辺には昔は多くの豪族の集落があったそうです。

⑦ 池尻池

遺跡が眠るコナラ、クヌギなどの雑木林に囲まれた公園になっており、水は澄んでいますが、残念ながら底部にヘドロがたまっています。おかねが井戸などからの湧水をここに一度貯めて温度を上げて農業用に利用していたようです。

⑧ 新町調整池

高圧線の下に10個の調整池が連なる姿は他では見られません。いかにここの湧水が多かったかを示します。新所沢変電所側のブロック積擁壁の下から湧水しています。このような箇所は所々で確認できます。工事中の写真ではほぼローム層のように見えます。

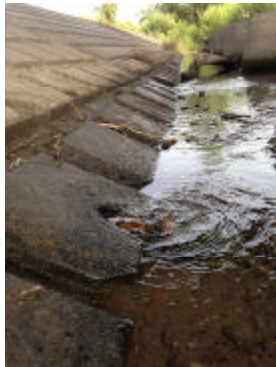
⑨ 新町下流調整池



⑩ 一本松の調整池



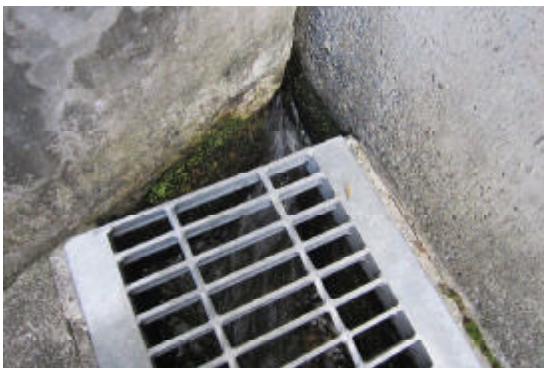
⑪ 栗生田大橋



⑫ こはるが池 (入西調整池、2021年9月23日)



⑬ 坂戸中央地下道



⑭ さかえ池



コラム 逆木の池

池のほとりに説明板が立っています。1440年の春、上杉氏と結城氏が河越の「北三ツ木原」で戦いをした時に、合戦が終わり、矢尽き刀折れた武士が杖にすがり、死に水を求めて迷い歩き、この池にやっとたどり着き、池のほとりに杖を逆さに差立てて、膝をつき、渴いた喉を潤し、こと切れたそうです。このつえが芽を吹き、大木となったので、いつしか「逆木の池」と呼ばれるようになったそうです。当時、この池は、中ほどがほっそりとくびれ、丁度楽器の琵琶の形をしており、ここを土地の人は「びわの首」と呼んでいます。

⑨ 新町下流調整池

坂戸台地一番の大湧水地の面影を残す鶴ヶ島市新町の区画整理でできた大規模な調整池群の最下流調整池です。この最下流の調整池のすぐ北側を通る鉄砲道は昔雨が降ると道路脇に水路ができ、県道の下を潜る土管には何と清水にしか住まないホトケドジョウがたくさんいて、子供たちはこれを取って遊んだそうです。いかに湧水が大規模で、周辺に影響したかを物語っています。

⑩ 一本松の調整池

住宅地に突然現れる大規模な掘割です。珍百景と言っても良いでしょう。この地域は昔、常に湧水に関連すると思われる浸水に悩まされ、下水道の整備をするにあたって浸透をさせる調整池として設置されたと考えられます。

⑪ 栗生田大橋

かつては高麗川湧水の代表的な湧水を鮮明にみる事ができました。高麗川の左岸に広がっていた水田はまさに身近な地下水のダムでした。水田をつぶしてスマートインターチェンジができました。このことが環境に与えるインパクトをここでモニタリングできます。写真は開発前の湧水です。

⑫ こはるが池（入西調整池）

入西の団地造成に伴う調整池です。南側等に数か所休憩地点がある公園にもなっています。池の周辺は立ち入り禁止となっていますが、野鳥がよく観察できます。最近少なくなっていますが、以前は水鳥のバードウォッチングのメッカでした。

⑬ 坂戸中央地下道

私たちが住んでいるこの土地の地下に地下水が流れていることを感じる事ができる湧水です。県道 39 号を高麗川方面に進み東上線前の左側階段を降りて、目の前の擁壁角の側溝をご覧ください。常に湧水しています。この清水を下水に流しているのはもったいないです。泉町に親水公園ができたらいいですね。

⑭ さかえ池

樹林に囲まれ、野鳥の休息場になっていましたが、2023 年に残念ながらすべて伐採されました（写真は伐採前の様子）。谷治川の源流であるさかえ池付近はかつては湧水地帯でしたが、宅地開発によって谷治川の河道も不明瞭で昔の面影はなくなりました。昔、さかえ池は「谷垂れの池」と呼ばれ、谷治川流域の水田を潤し、生活を支えました。

■ 参 考

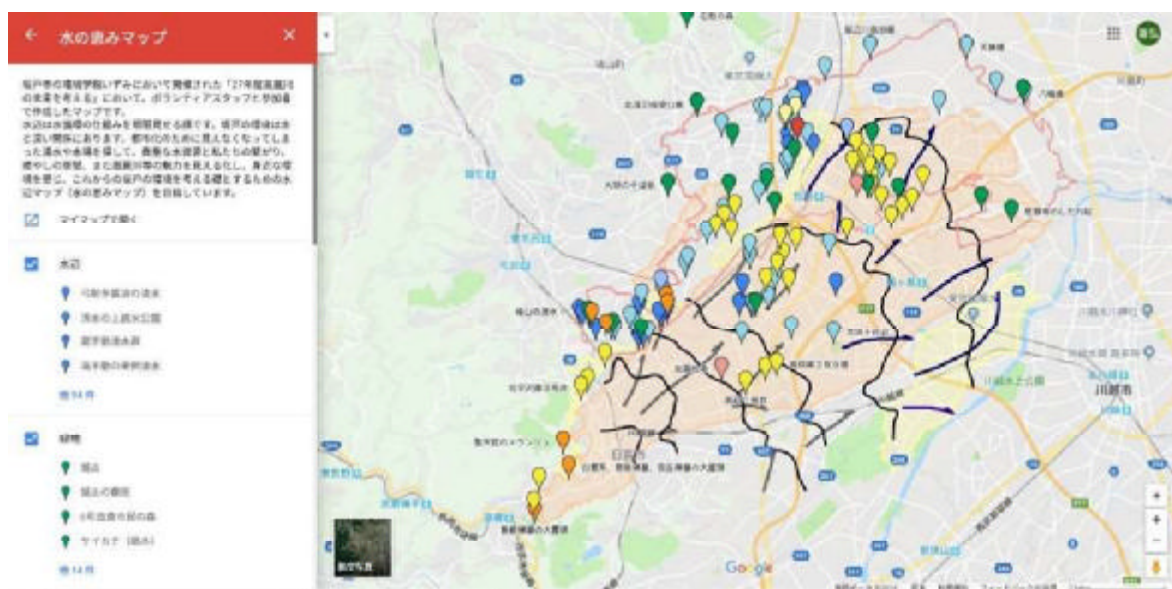
この記事は、環境学館いずみでこれまで行ってきた観察会・講座の成果に基づいています。

時 期	観察会・講座の名称	講 師
平成 25 年 8 月 25 日	高麗川の湧水	ボランティア 稲垣 喜弘
平成 28 年 9 月 13 日	水の恵みマップ	ボランティア 稲垣 喜弘

コラム 水の恵みマップ

坂戸市環境学館いずみで開催された「平成 27 年度高麗川の未来を考える」において、ボランティアスタッフと参加者で作成したマップです。

貴重な水資源と私たちの繋がり、癒やしの空間、また高麗川などの魅力を見える化し、身近な環境を感じ、これからの坂戸の環境を考える礎とするための水辺マップ（水の恵みマップ）を目指しています。



凡 例

1. 地図の区分

- ① 地形区分（オレンジ：武蔵野面（坂戸台地）、黄色：立川面）
- ② 地下水など等高線

2. ピンの区分

- ① 湧水：青い色
- ② 井戸：黄色
- ③ 池・水辺の施設：水色
- ④ 緑地：緑色
- ⑤ 景観・露頭：茶色

■ マップでできること

- ・ 地図の入れ替え、（空中写真、3Dも）
ピンや地形区分などの表示、非表示も選べます。
- ・ ピンなどのポップアップ（ピンなどにある情報の表示）
例えば、今日行くところのピンをクリックすると、その場所の写真と情報を見ることが出来ます。
（右図はスマホ画面例です）

※Google マップを使っているのので、同サイトの登録が必要です。



（稲垣）